

# The Kagawa Museum NEWS

Vol. 46

香川県立ミュージアム  
ニュース  
2019 秋



①

②



③

④



## CONTENTS

特集 日本建築の自画像 —探求者たちのもの語り—  
調査研究ノート 建築家と写真  
トピック 多分野から触れる建築  
れきみんだより 津田村北山の勝之助、異国に漂流  
展示室だより 城と城下町

「日本建築の自画像—探求者たちのもの語り—」展示資料  
海の建築・山の建築

写真①、②：鳴門市文化会館／増田友也（1982年竣工）／徳島県鳴門市  
写真③、④：国宝豊楽寺薬師堂／鎌倉時代中期／高知県長岡郡大豊町  
建築は、年代や設計意図、用途が異なっても、その場の周囲景観と一体を  
なし、歴史的風土を形成することには変わりがない。

# 日本建築の自画像—探求者たちのもの語り—

—こんにちは、NEWS編集担当です。9月から始まる特別展ですが、どんな内容の展覧会ですか？

「日本建築」とは、何だろうか？を、様々な視点から問いかける展覧会です。

そもそも、「日本的」ってどういうものを指すのでしょうか？

—……。そ、そうですね。難しいですね。

この展覧会では、「日本的」な建築とは何か？を、自問自答しながら探求し、実際に制作していった建築家たちや、彼らを取り巻く時代背景や思想、そして制作された建造物の位置する場所がもつ風土や歴史性まで目配りして紹介しながら、「日本建築」とは何か？を問いかけていきます。

—建築の造形そのものだけでなく、その建物が制作された歴史的・地理的背景も紹介するということですね。

はい。美術と歴史、それぞれの手法で、「日本建築」へアプローチしています。

—地域にもこだわりを持って紹介しているのですか？

地域で育まれてきた建築文化の魅力を発信します。特に香川—四国—瀬戸内という地域性、海と山が近くにあり影響しあっているという地理的特徴を踏まえて、そこで育まれた建築・集落から近現代建築にまでつながる魅力に光を当てています。東京で開催する展覧会とは、一味も二味も違う展覧会です。

—瀬戸内国際芸術祭2019も開催していますよね。

この展覧会は、芸術祭のメニューの一つにもなっています。

—ところで「自画像」というのは？

明治以来、近代日本で形作られてきた「日本建築」というイメージを、3つの視点からなる複数のまなざし、これを「日本建築の自画像」として、捉えていきます。では、さっそく、第1の自画像から紹介します。

## 第1の自画像

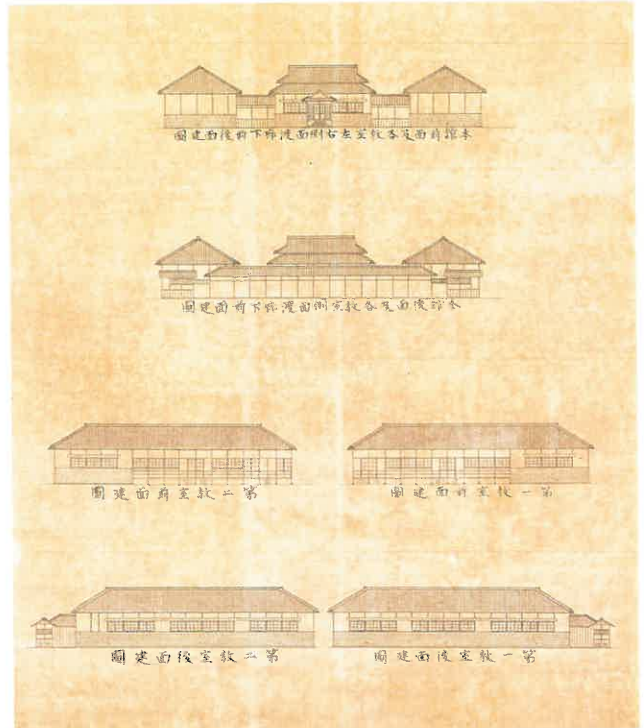
—「日本建築」のアイデンティティを求めて—

—まずは、明治期からの話ですか？

明治以降の近代化=西洋化が進む中で、「日本」のアイデンティティを求めていった建築家たちの姿が、第1の自画像です。

—法隆寺や平等院、そして伊勢神宮といったお寺や神社が紹介されていますね。

「建築」という言葉を作った伊東忠太(1867~1954)の動きを中心に紹介しています。古建築の中に「日本」を求め、それを自ら制作する建築に投影していきました。



山内尋常小学校図面(部分) 平等院鳳凰堂をイメージさせるファサード  
高松市立国分寺南部小学校蔵

また、地域のアイデンティティとして日本古来=「根元」の建築を求める動きは、竪穴住居の復元にもリンクしていきました。

—全国の遺跡で見られる復元された竪穴住居って、そういう文脈で作られたんですか。驚きです。

## 第2の自画像

—「日本建築」を創る建築家たち—

第2の自画像では、それまでに様々な「日本的」なイメージを手に入れた建築家たちが、実際の制作にそのイメージを活かしていった姿を紹介します。

—時代では、昭和初期からの動きですね。

東京帝室博物館(現在の東京国立博物館本館・1937年竣工)が再興されるにあたり、「日本趣味を基調とする東洋式」という応募規定でコンペが開かれました。「日本趣味」をどう解釈し表現するかが、問われました。

—「日本趣味」とは何か？ですね。

瓦屋根をいただく「帝冠様式」が、この時の1つの回答だったのです。

—そして、丹下健三(1913~2005)など、有名な建築家の名前が出てきますね。

彼らは、「日本的」なもの、「伝統」から、新しい「日本的」な建築を創造していきました。丹下健三の代表作、香川県庁舎（1958年竣工）は、近代的な素材（コンクリート、鉄、ガラス）を用いながら、柱と梁による構成や、襖や障子のようなサッシなど、日本の伝統を再構成しています。



香川県庁舎(市川靖史 撮影)

—五重塔のようだ、という話も聞きます。

また、建物だけでなく、周囲の空間にも建築家たちの視線が広がり、空間の中の建築というアプローチが出てきます。

—地域性に留意する視点が生成されていったのですね。

### 第3の自画像

—地域に住まう人たちにとっての「日本建築」—

—第3の自画像は、これまでとは趣が異なりますね。

ここでは、地域の人々が、日々の生活の中から蓄積し、紡ぎ出してきた姿を「自画像」として紹介しています。「日本建築」が制作される場からのアプローチです。

—海や山の建築、集落などを紹介していますね。

海と山が近い瀬戸内の集落、そうした環境で作られてきた建築を紹介します。たとえば、海の建築としての厳島神社や、山の建築としての豊楽寺薬師堂（高知県）。海と山をつなぐ意味では、金毘羅さんがあります。こうした伝統的な建築と、瀬戸内海歴史民俗資料館といった近現代建築につながる地域性

を取り上げます。女木島や直島といった瀬戸内の島々でのフィールドワークの成果も交えて、紹介します。



女木島(1957年)



女木島(2019年)

—使う側からの紹介は、これまでの建築の展覧会にはありませんでしたね。

実業家白洲次郎や故国を逃れ日本にやってきたドイツ人の建築家ブルーノ・タウトらが民家を使いこなす姿や、団地といったコミュニティをデザインする建築など、住む側の視点から「日本建築」とは何かを問いかけます。建築は制作する建築家だけのものではない、という「自画像」を紹介します。

—なかなか、「骨太」な「自画像」ですね。

—最後に、NEWSをお読みの皆様へ。

設計図や写真に加え、建築模型や動画も用いた立体的な展示構成になっています。展覧会を見た後には、実物もぜひご覧ください。現地見学会なども予定しています。

「日本建築」というイメージが持つ豊かさを感じ、そして「日本的」とは何か、について考える機会にさせていただけたら、と思います。

最新情報は随時ホームページで紹介しますので、お見逃しなく。

(主任専門学芸員 渋谷 啓一)

| 展 | 覧 | 会 | 情 | 報 |

特別展

日本建築の自画像

—探求者たちのもの語り—

9月21日(土)～12月15日(日)

開館時間:9:00～17:00(入館は閉館の30分前まで)

※9～11月の毎週土曜日、9月22日、10月13日、11月3日は20:00まで開館

休館日:9月24日、30日、10月7日、15日、21日、28日、11月5日、11日、18日、25日、12月2日、9日

観覧料:一般1,200円 前売・団体・瀬戸芸パスポート提示(1回限り)1,000円

※高校生以下、65歳以上、身体障害者手帳等をお持ちの方は観覧料無料

●関連イベント ※8頁インフォメーションをご覧ください。

# 建築家と写真

建築家は何をみつめていたのでしょうか。このたび、当館で建築家・神谷宏治(1928～2014)の資料をお預かりすることになりました。ここでは、日本を代表する建築家・丹下健三(1913～2005)による《香川県庁舎》の実質的な建築に携わった神谷宏治、そして郷土の建築家・山本忠司(1923～1998)が残した写真資料から読み解きます。

神谷は、丹下研究室のメインスタッフとして、《香川県庁舎》(1958年竣工)の仕事に携わりました。香川との関わりはその後も続き、晩年には当館で開催された展覧会「丹下健三 伝統と創造-瀬戸内海から世界へ」の実行委員会の総括を務め、2014年に他界しました。

香川県大川郡に生まれた山本は、《香川県庁舎》の建設では香川県の営繕課(のちの建築課)の担当職員として神谷と協働し、日本建築学会賞(作品)等に応じられた《瀬戸内海歴史民俗資料館》(1973年竣工)など戦後香川を代表する建築を世に送りました。

2人は、膨大な写真資料も残していました。そこから見えることは、建物内部において人々はいかに佇み、くつろぎ、憩うのか、竣工後も追い続ける神谷のまなざしです。写真からは、建築が社会にどのように定位していくのかを見つめ続けようとする意志が感じられます。神谷は、1954年の《津田塾大学図書館》(1954年竣工)の撮影で、ガラス窓を壁と一体にすることで建物内部に陽光が差し込み、椅子に腰掛ける人々が読書



津田塾大学図書館 神谷宏治撮影(1954年)



香川県庁舎1階ロビー 神谷宏治撮影(1998年)

する様子を収め、1998年の《香川県庁舎》の撮影では、猪熊弦一郎の陶板壁画《和敬静寂》を背景に、ロビーで椅子に座る人々が閲覧する様子を捉えていました。神谷が1958年も《香川県庁舎》を撮影していたことを踏まえると、設計した建物がどのように使われているか見続けていたことがわかります。

くわえて、建築の空間構成、つまりいかなる動線を辿り建物内部に進むのかを追う山本のまなざしも見えてきます。そこには、建物と周囲をひと続きのものにしようとする意志が感じられます。山本は、《瀬戸内海歴史民俗資料館》や《瀬戸大橋記念館》(1988年竣工)の撮影では、玄関口につながる階段や通路を収めていました。ニューヨークのビル街、あるいは郊外の住宅では、建物の周囲の交差点、車、通行人、畑、山の様子を写していました。

以上のように、彼らの写真資料から、彼らが建物だけに注目するのではなく、建物を使う人々のありようと建物周囲の環境に心を寄せていることがわかりました。

常設展「建築家たちの見た風景—写真を通した「まなざし」—」では、人々と建築との関係性や、建築それぞれが有する周辺環境との関わりについて掘み取ろうとする彼らのまなざしを感じていただければ幸いです。

(学芸員 日置 瑤子)

| 展 | 覧 | 会 | 情 | 報 |

建築家たちの見た風景

—写真を通した「まなざし」—

9月20日(金)～12月15日(日)

場 所:常設展示室2

開館時間:9:00～17:00 ※入館は16:30まで

休 館 日:月曜日(月曜日が休日の場合、翌火曜日)

■ミュージアム・トーク:10月19日(土)、11月24日(日)各13:30～

## 多分野から触れる建築

特別展「日本建築の自画像—探求者たちのもの語り(以下「建築展」)」の担当学芸チームは全員が建築専門ではないという珍しいメンバー構成です。展覧会を準備する中で、各々どのように建築を見ているのでしょうか。今回、主担当の佐藤(考古)以下、一柳(美術)、渋谷(歴史)、谷川(歴史)、信里(考古)、日置(美術)の担当者6名の中から4名が語り合いました。

一柳: 展覧会の準備中、建築のイメージは変わりましたか? 私は民家を調べる中で地域や風土との関係性を知り、建築はこれまで思っていたよりもずっと幅広い概念だと感じています。建造物だけではなく、人の暮らしやコミュニティなども建築の要素に含まれることには驚きました。

渋谷: 今回の建築展はたぶん普通の“建築展”ではないと思います。建築家個人や建築集団が主語になるような建築展でなく、その建築がどうして作られたのかと考えるものです。そういう意味で私は、歴史的な背景を踏まえてどういうふうな形に表れているかを考えます。担当している沖縄は端的な例。元々は日本・中国それぞれの文化を汲んだ寺院の建築と、人々が普段暮らす住宅があって、戦後に米軍がコンクリートブロックを使った住居を建て、それらの特徴を諸々合わせて名護市庁舎というひとつの形が出来ていく。地域の歩んできた歴史が建築には現れていると思います。

一柳: 歴史の視点から建築について相対的に考えているんですね。「建築って誰のもの?」をキーワードに、様々な分野で建築を捉えるのはこの建築展ならではのアプローチだと思います。

谷川: 建築展に関連して、各地の建物を調査・研究しました。弥生時代の建物を説明するのに、よく使われる登呂遺跡の高床式倉庫(復元)は、昭和期に建築史家が神宮の社を参考に復元設計したと知った時、とても衝撃を受けました。また、瀬戸内海の建築と異なる視点から、チセ(アイヌの家屋)を調べたときは、北海道各地でその土地に根ざした生活があることも改めて知りました。いずれも、「目からうろこ」と感じました。

日置: 人と、暮らしと、環境と、モノとしての建築が、行きつ戻りつ関係しているという考えを持ったことは一番の変化です。今、建築家の山本忠司と神谷宏治が撮影した写真を調査し

ていますが、二人の撮り方はだいぶ違う一方で、建物を建てる時、もとの風景や環境はどんなふうだったのか、ここにどういう目的を持った人たちが来て、どういうものが関わっていくのか、という共通した視線を感じます。

一柳: 担当者の視点が本当に様々ですね。建築というテーマを通すと、一人ひとりの違いが際立つようです。

谷川: ひとつの建築でも、人によって視点が違って、そうした色々な見方を整理しながら進めなければ、と思うこともあります。

渋谷: 様々な見方やとらえ方を重ね合わせ、場合によっては取捨選択しながら考える必要がありますね。

日置: 私は、悩むときには色々な見方や思考が重なり合っていることが多いので、一枚一枚はぐようにして、本質に近づくようにします。

一柳: 本質に近づこうとすると、一方では重ね合わせ、もう一方でははぎ取っていくとする。アプローチとしては真逆ですね。展覧会に立ち返ると、担当箇所ごとにそれぞれが思い描く建築の自画像にも個性が出そうです。

日置: それぞれの建築の自画像が現れて、観覧者にそれを感じてもらえたら、展示としていい形になったのかなって思います。

(編集:主任学芸員 一柳 友子)



名護市庁舎(沖縄県)

# 津田村北山の勝之助、異国に漂流

江戸時代、大坂や江戸が大消費都市として発達し、都市と地方の海上交通網が整備されるに伴い瀬戸内海には多くの廻船が往来するようになりました。また瀬戸内海に面する地域で生活している人たちが、このような廻船に乗り込み船働きをする人たちも多くなりました。

廻船による海上輸送は、時として自然の脅威にさらされ、当時は気象予報や航路標識も未整備であったため、現在以上の危険と隣り合わせの航海でした。

船働きをしている内に、思いがけず異国に漂流し、紆余曲折を経て無事に帰国することができた津田村北山(現さぬき市津田町)の勝之助の漂流奇譚を紹介します。



「南夷図録」より勝之助の図 個人蔵

## 神力丸漂流

文政13年(1830)8月岡山の神力丸は、岡山藩の年貢米などを江戸へ廻送している途中、紀州潮岬付近で暴風雨に遭遇し自力航行不能となってしまいます。その後2ヶ月近く太平洋上を漂流し、乗組員19名中5名が亡くなるも、なんとかフィリピン・パターン諸島のひとつに漂着します。その後、現地地方官の取り調べを受け、勝之助一行はマニラからマカオ、広東へ移送され、天保2年(1831)10月乍浦という地から中国人商船により長崎に送還されます。一行は長崎奉行所で詳細に調べられた後、天保3年(1832)7月から8月にかけて船員それぞれが生地に帰郷します。

## 勝之助の見聞録

勝之助は帰国した際、これまでの経緯を長崎奉行所や高松藩で調べられ、その時の公式記録である「口書」が作成されました。高松藩が作成した「口書」の原本は、現在確認することができていませんが、高松藩領内の庄屋家などの資料目

録中にこの時作成された口書の「写し」を見つけることができます。当時、何らかの方法で写筆され領内に配布していたことがわかります。高松藩の家老であった木村黙老もこの漂流奇譚に興味を持ったようで、自身の随筆「続きくまの記」にこの勝之助の漂流譚を記しています。

また勝之助本人から直接話を聞き、書き記した「聞書」も県内で数点見ることができます。東かがわ市の旧家には「南夷図録」と標し、勝之助が異国漂流の際に見聞した、異国の様相や現地の人たちの服装・動植物などを色鮮やかに描いた資料がのこされています。これは国学者で画人としても知られた白鳥神社宮司猪熊方主(慶林)によるものであり「ことし(天保4年)正月二十九日に勝之助にあひて、ものかたりをきける」とあり、勝之助が猪熊家に来訪したか、猪熊方主が勝之助の家を訪れたかは不明ながら、両人が直接会い詳細な漂流譚を聞いた上で、この資料が作成されたことが書き記されています。

このように「口書」が多く写筆されたことや「聞書」が作成されたことは、海外への渡航が禁止され、海外情報についても厳しく管理され、海外からの情報が入ってこない江戸時代において、当時の人たちは見たことも聞いたこともない異国への興味・関心が非常に高かったことをあらわします。

勝之助は幸いにして無事帰国ができましたが、海難に遭い亡くなる人や、漂流し帰国できずその地で没する人たちの存在も容易に想像ができます。「板子一枚下は地獄」ということわざが海で働くことの厳しさをあらわしています。

(主任専門職員 芳澤 直起)

(参考文献)倉地克直「漂流記録と漂流体験」思文閣出版、2005年



「南夷図録」よりとかげ  
長三尺(約90cm)ばかり  
番旦(パターン)

「人この蜥蜴を見れば殺すよし也 勝之助もこれを見たり」と記載。個人蔵

| 展 | 覧 | 会 | 情 | 報 |

瀬戸内海歴史民俗資料館テーマ展

板子一枚下は地獄—瀬戸内海の手難—

9月21日(土)～11月24日(日)

場 所:瀬戸内海歴史民俗資料館 第9・10展示室

開館時間:9:00～17:00 ※入館は16:30まで

休 館 日:月曜日(月曜日が休日の場合、翌火曜日)観覧料無料

常設展示室 1

# 城と城下町

9月20日(金)～12月15日(日)

戦国時代から天下統一へと向かう時期になると、平地に城が設けられ、周囲には大名に仕える武士たちや商人・職人たちが住む城下町が形成され、政治や経済の中心となりました。その様子を紹介する「城と城下町」の展示品から、当時の状況を少しのぞいてみましょう。

## 高松城下町の中心・丸亀町

現在も商店街としてにぎわう丸亀町が本格的に整備されたのは、高松城が建てられてから少し後のこととなります。「<sup>りゅうぼくめんじんわ</sup>綾北間尋抄」などの記録では、慶長15年(1610)に丸亀に住んでいた人びとを高松に移して住ませたことから丸亀町が始まったと記されています。城下町が拡大していく中で生まれた町のひとつだったのです。丸亀町のにぎわいは、「高松城下図屏風」でもうかがうことができます。



高松城下図屏風(丸亀町の部分) 当館蔵

## 「丸亀町絵図」

江戸時代の中ごろに作成された丸亀町の様子を示す「丸亀町絵図」という資料が遺されています。丸亀町に住んでいた商人の家に伝わったもので、現在当館で保管されています。町の様子をくわしく描いた絵図はほとんど遺っておらず貴重な資料です。宝暦3年(1753)に高松藩からの命令で作成された

「丸亀町絵図」は、縦89.3cm、横225.5cmという大型の絵図で、江戸時代の終わりまで100年以上も、町を運営する基本図として用いられました。

## 丸亀町の様子

南北に走る通りの両側に短冊のようなかたちが並んでいますが、これが屋敷地の区切りです。区切りの中に記されている名前は「〇〇屋」という屋号をもつ家ばかりで、丸亀町は商人の町であったことがわかります。短冊状の区切りの大きさはさまざまで、大小の店が立ち並んでいた様子をうかがうことができます。一番大きな屋敷で12間=21.8m以上の間口があります。もともと、この屋敷は後に二つに割られ、2軒の店に変わっていきます。住む人が入れ替わるとともに、町の様子も変化していったのです。

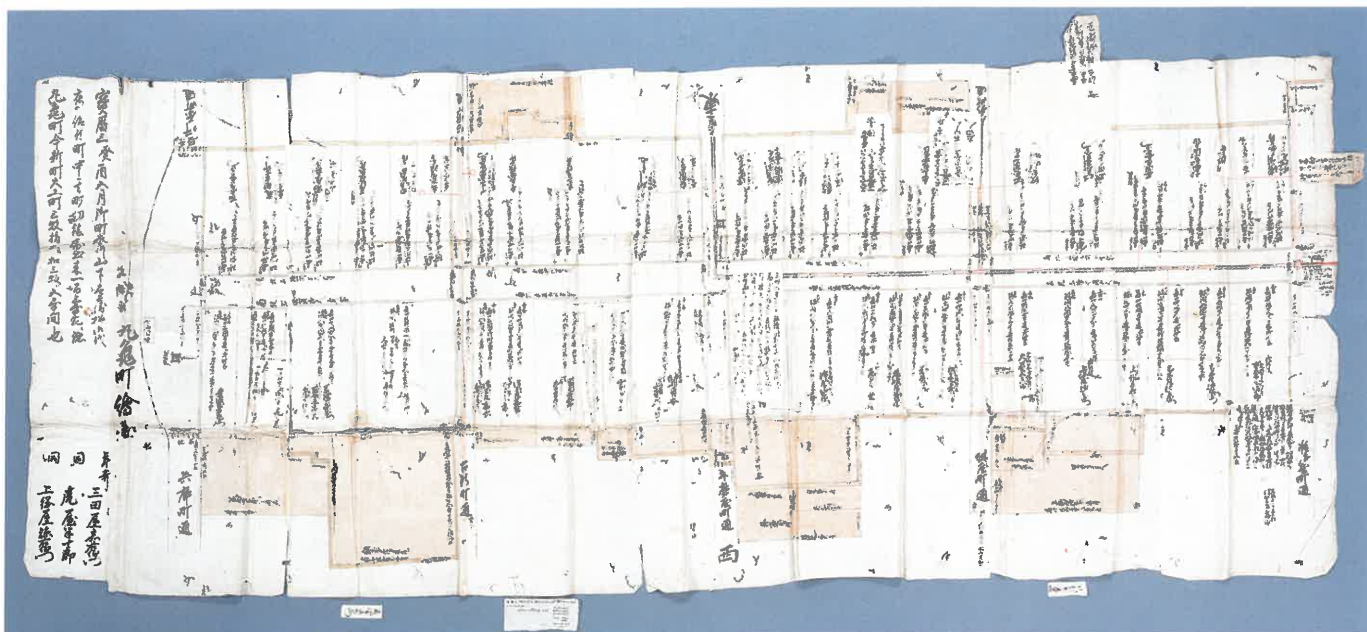
絵図には地中に埋められた上水道も描かれています。一部の屋敷では上水道から屋敷へ水を引き込み、内井戸(屋敷内の井戸)としましたが、多くの屋敷は上水道を水源とする共同井戸の「辻井戸」を利用していました。

上水があれば下水もありました。南北と東西に走る通りで形成される区画の周りに下水が設けられています。下水の具体的な様子は他の資料からはほとんど分かっておらず、城下町の実態を示す貴重な情報です。

常設展「城と城下町」では、ここで紹介した「丸亀町絵図」のような絵図資料や当時の様子を記した文献資料をもとに、讃岐国の城下町の様子について示していきます。

(主任専門学芸員 御厨 義道)

■ミュージアムトーク／10月14日(月・祝)、12月7日(土) 各13:30～



丸亀町絵図 当館保管

特別展 「日本建築の自画像—探求者たちのもの語り—」関連イベント

講演会 聴講無料・要事前申込

◎日本建築の自画像(仮)

「日本建築」とは何か。歴史家、建築家、地域の人々によるイメージ形成や実践を語ります。

日時:10月6日(日) 13:30~  
場所:地下1階 講堂  
講師:藤森照信氏(東京大学名誉教授、東京都江戸東京博物館館長)  
定員:230名(先着順)  
申込期間:8月27日(火)~、定員になり次第終了

シンポジウム 聴講無料・要事前申込

◎瀬戸内建築の魅力を語る

瀬戸内固有の風土や地形の中で育まれた、建築の魅力を大いに語ります。

日時:10月20日(日) 13:00~16:00  
場所:地下1階 講堂  
パネラー:松隈洋氏(京都工芸繊維大学教授)、  
秋元雄史氏(東京藝術大学大学美術館館長)、  
宮畑周平氏(瀬戸内編集デザイン研究所代表)  
定員:230名(先着順)  
申込期間:9月10日(火)~、定員になり次第終了

学芸講座 聴講無料・要事前申込

◎建築展 連続講座

会期中に適宜開催します。詳細はホームページをご覧ください。

建築ツアー

会期中に適宜開催します。詳細はホームページをご覧ください。

香川県立ミュージアム講演会・シンポジウム・講座の申込方法

電話、はがき、FAX、かがわ電子自治体システムを利用したインターネットから。はがき、FAXの場合は、氏名、電話番号、イベント名を明記してください。

申込先:〒760-0030 高松市玉藻町5番5号 香川県立ミュージアム学芸課  
TEL.087-822-0247 FAX.087-822-0049  
かがわ電子自治体システム(電子申請・届出サービス)  
<https://s-kantan.com/pref-kagawa-u/>

瀬戸内海歴史民俗資料館テーマ展

◎板子一枚下は地獄—瀬戸内海の大難—

当館が所蔵する海難文書や遭難後に生還への感謝の意を込めて神社に奉納された難船絵馬などを展示し、当時の海上交通の様子を紹介します。

会期:9月21日(土)~11月24日(日)  
場所:瀬戸内海歴史民俗資料館 第9展示室、第10展示室  
開館時間:9:00~17:00 ※入館は16:30まで  
休館日:月曜日(月曜日が休日の場合は、翌日火曜日)

瀬戸内海歴史民俗資料館 地域連携展示

◎豊かな恵みをうけて 昔の道具からたどる豊島の暮らし

昨年、当館は豊島小中学校保管の民俗資料の再整理を行いました。それをふまえ、今年度は豊島の昔の道具をテーマにした展示を行います。豊島の豊かな自然環境、その恵みをうけて育成された伝統的諸産業や文化について考える機会となれば幸いです。

会期:10月26日(土)~11月4日(月・祝)  
場所:旧豊島中学校(小豆郡土庄町豊島)  
開館時間:10:00~16:00 ※入館時間は15:30まで  
休館日:10月28日(月)

れきみん普及事業 要事前申込

①れきみん講座「江戸時代異国漂流譚」

江戸時代、異国に漂流した人たちが帰国後、その経緯や漂流先の出来事を話した「漂流譚」は、多くの人たちの関心を集めました。その時に書かれた古文書を読み解き当時の様子を紹介します。

日時:10月12日(土) 13:30~15:00  
場所:瀬戸内海歴史民俗資料館 研修室  
講師:芳澤直起(瀬戸内海歴史民俗資料館主任専門職員)  
定員:40名(先着順)  
申込期間:9月14日(土)~、定員になり次第終了



②れきみん講座「瀬戸内の盆行事」

香川県内や瀬戸内地方にみられる盆行事を通して、お盆における新仏や先祖との交流のようすを紹介します。

日時:11月16日(土) 13:30~15:00  
場所:瀬戸内海歴史民俗資料館 研修室  
講師:田井静明(瀬戸内海歴史民俗資料館館長)  
定員:40名(先着順)  
申込期間:10月19日(土)~、定員になり次第終了

③ワークショップ「瀬戸内の島を訪ねる②—豊島—」

豊島家浦地区を訪ね、島在住の方からお話を伺います。その後、「豊かな恵みをうけて 昔の道具からたどる豊島の暮らし」を見学します。

日時:10月27日(日) 10:00~13:00  
場所:豊島家浦地区(小豆郡土庄町豊島)  
講師:当館職員ほか  
定員:20名  
参加料:50円 ※別途船賃(定期船)が必要  
申込期間:9月25日(水)~10月16日(水)

①②れきみん講座の申込方法

電話、はがき、FAX、「かがわ電子自治体システム」(\*)を利用したインターネットから。はがき、FAXの場合は、氏名、電話番号、講座名を明記してください。

③れきみんワークショップの申込方法

往復はがき(1枚につき3名まで)、「かがわ電子自治体システム」(\*)を利用したインターネットから。往復はがきの場合は、氏名(ふりがな)、住所、電話番号、ワークショップ名を明記してください。申込者多数の場合は抽選となります。  
申込先:〒761-8001高松市亀水町1412-2 瀬戸内海歴史民俗資料館  
TEL.087-881-4707 FAX.087-881-4784

カフェポット ミュゼ

秋の限定メニューを販売予定。  
夜間開館日は20:00まで営業しております。



ミュージアムショップ

建築展に合わせて関連グッズや書籍を販売しております。来館の際はぜひお立ち寄りください。



■営業時間:9:00~17:00(夜間開館の日は20:00まで)

※「かがわ電子自治体システム」を利用する場合  
香川県ホームページ「電子申請・施設利用申込」

香川県ホームページ「お役立ち情報」のトップ「かがわ電子自治体システム」から「電子申請・届出サービス」をクリック



香川県立ミュージアム

〒760-0030 高松市玉藻町5番5号  
TEL.087-822-0002(代表) FAX.087-822-0043  
<http://www.pref.kagawa.lg.jp/kmuseum/>



【分館】瀬戸内海歴史民俗資料館

〒761-8001 高松市亀水町1412-2  
TEL.087-881-4707 FAX.087-881-4784  
<http://www.pref.kagawa.lg.jp/setorekishu/>



【分館】香川県文化会館

〒760-0017 高松市番町1丁目10-39  
TEL.087-831-1806 FAX.087-831-1807

